

アマチュア演劇を生きる（その2）  
—難波忠男の演劇人生—

五島 朋子

An Amateur Theatre History in Tottori (Part 2)  
—Tadao Namba : A Man Who Dedicated His Life to Theatre—

GOTO Tomoko

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第19巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 19 / No. 2

令和4年12月16日発行 December 16, 2022

# アマチュア演劇を生きる（その2）

— 難波忠男の演劇人生 —

五島朋子\*

An Amateur Theatre History in Tottori (Part 2)

— Tadao Namba: A Man Who Dedicated His Life to Theatre —

GOTO Tomoko\*

キーワード：アマチュア演劇，鳥取市民劇場，NHK 鳥取放送劇団，地域演劇，難波忠男

Key Words: Amateur Theatre, “Tottori Citizen’s Theatre”, “NHK Broadcast Theatre Group”, Regional Theatre, Tadao Namba

## I. はじめに

舞台に関する産業のない地方都市で，俳優や演出家という職業は成立しない。一方で，職業を持ちながら余暇や趣味としてアマチュアで演劇活動に終生携わり続けることも，たやすいこととは言えない。舞台は，個人作業で完結しない表現活動であり，集団での共同作業を前提とするからだ。演劇への衰えることのない執念と情熱，そして創造のための集団やコミュニティを維持していく力がなければ，長期にわたって演劇に携わるのは至難のことである。

本稿では，既報「アマチュア演劇を生きる（その1）—鳥取県立図書館難波忠男寄贈資料から—」（五島 2022）に続き，図書館寄贈資料および関係者への聞き取りをもとに，鳥取帰郷後の難波自身の演劇活動の足跡をたどる<sup>1</sup>。難波が鳥取で精力的に活動を始めた 1950 年代末は，市民会館など公立文化施設は未整備で<sup>2</sup>，自治体や公的な団体が演劇公演の鑑賞機会を提供したり，演劇ワークショップのような人材育成の機会を提供することもなかった。また，芸術文化への公的助成金制度，企業メセナ，アートマネジメントといった仕組みや概念が登場するのは 1990 年代であり，演劇学の専門分野においても文化政策やアートマネジメントの領域においても，地方都市におけるアマチュア演劇に対する関心は，これまで非常に限られたものであった（須川 2021，日比野 2022）。

本稿の目的は，東京中心の演劇史から抜け落ちた地方のアマチュア演劇活動の足跡を記すことで，日本の演劇史の豊富化に寄与するとともに，「地域演劇」の活動が持っていた多面的な姿を描き出すことによって，アマチュア演劇活動が持つ文化的，また社会的な側面と可能性を明らかにすることである。

本稿で取り上げるような，戦後の地方都市で結成され，代表者が変わりながらも現在も演劇活動を継続している長寿劇団は，いくつか確認できる。例えば，岩手県西和賀町の劇団ぶどう座は，1950 年に創立され，現在も細々とだが劇団は活動を継続しており，その足跡と地域との関係，および芸術的な成果については『戦後日本のコミュニティー・シアター 特別でない「私たち」の演劇』（須川 2021）に詳細にまとめられている。また，北九州市のアマチュア劇団青春座は，戦後まもない 1945 年 10 月に創設され 2022 年の現在も年に 2 回の定期公演を打ち，その健在ぶりには目を見張る。劇団がこれまでの公演記録集を刊行しているが，1990 年代の北九州演劇祭や，北九州芸術劇場の整備といった自治体の文化政策との関係，また地域の文化活動における役割など今後の論考が求められている。

戦後の新劇運動の影響を受け，各地に誕生したアマチュア劇団の活動は活動歴が長くても，中心となった新劇運動が東京の演劇界の中でも古臭いものとして顧みられなくなると，地域でもこれら劇団の文

---

\*鳥取大学地域学部国際地域文化コース・地域学部附属芸術文化センター

化的・社会的影響力や発信力は弱まり、新しい演劇活動に勢力を奪われていったかに見える。しかし、世紀を超えて活動を継続するこれら老舗の劇団活動の足跡を、新たな視点で振り返ることによって、地域における演劇活動の意義と役割が見えてくる。

本稿で取り上げる難波忠男は、1996年9月に71歳で亡くなり、彼が代表を務めた劇団「鳥取市民劇場」は、その後新たな代表に引き継がれた。近年は、劇団の活動は途切れているが、戦後各地に放送局によって創設された劇団を母体としていること、東京で専門的に演劇を学び実践していた人物が代表を務めていたこと、演劇鑑賞会やおやこ劇場といった全国各地に誕生した会員組織の成立と関わっていることなど、同時代の地方都市の演劇活動・文化環境の動きと変化をよく反映するものであり、地方のアマチュア演劇活動の一事例にとどまらない視点を提供できる。

## II. 母体としてのNHK鳥取放送劇団

### 1. ふたつの放送劇団

戦後、ラジオ放送といった新しいメディアが全国に普及していく中で、各地に番組制作のために放送局によって「放送劇団」が創設された。鳥取では1936年開局のNHK鳥取放送局が1946年2月11日に「鳥取放送劇団(仮称)」を創設する<sup>3</sup>。意欲を持ったメンバーが集ったが、朗読などの稽古を重ねても実際には放送の機会が訪れず、活動の場がないことに業を煮やし、指導者として招かれていた砂川哲夫(1919-2013)を中心に、同年7月にはNHK鳥取放送局の手を離れて、劇団「鳥取演劇集団」(以降、断りが無い限り演劇集団と記す)が結成された<sup>4</sup>。砂川は、旧制鳥取一中(現在の鳥取県立西高等学校)卒業後、法政大学に進学、演劇研究会に所属、プロの演出家を志していたが、戦争を経て帰郷、家庭の事情もあり東京で演出家になることは諦め、放送劇団に集ったメンバーとの演劇活動に力を注いでいく。

演劇集団結成後、まず詩と戯曲の朗読発表会を重ね、1948年春に鳥取県東部各地で移動公演を実施、同年6月に第1回公演として2作品(岸田國士作『命を弄ぶ男二人』、佐藤道子作『母の思想』)を上演、以後1954年まで各地の青年団での演劇指導なども含め非常に精力的な舞台公演を行なった。演劇集団は、その後1950年代にはNHK鳥取放送局のラジオ番組にも盛んに出演しつつ、砂川を代表に、戦後の鳥取市の中心的かつ長い活動歴を持つ地域劇団のひとつとなった<sup>5</sup>。

1950年、NHK鳥取放送局に着任した岡本愛彦(1925-2004)<sup>6</sup>の発案で、改めて放送劇団が創設されることになった。1951年1月に入団試験を実施、226名の応募者の中から13名が選ばれ、新生「鳥取放送劇団」が結成された<sup>7</sup>。難波は、この後発の放送劇団に入団試験は経ず、東京での演劇活動を断念するより前の1952年ごろから参加するようになった。放送劇団1期生の前田翠は、岡本から「今度、東京で演劇を本格的にやっていた人が帰郷するから、入ってもらうことになった」と紹介があったことを記憶している<sup>8</sup>。入団者には、岡本やNHKのアナウンサーらが、発声やアクセント、イントネーションの指導にあたった。岡本は「ラジオドラマ」を新しい時代の表現と捉えるとともに、「演劇」の特質を基盤と考え、演劇とは何か、劇団とは何か、演じるの意味、演技者の役割、スタニスラフスキーの演技論などを放送劇団員に講じている<sup>9</sup>。岡本が創設した第2次ともいべき放送劇団が、のちの「鳥取市民劇場」(以降、市民劇場と記す)というもうひとつのアマチュア劇団の母体となった。NHK鳥取放送劇団は、戦後の地域演劇の展開に影響を与えることとなる劇団の孵卵器だったのである。

このように放送劇団メンバーが、地域の演劇活動の核となった事例は、鳥取に限ったことではなかったようだ。例えば福岡県の劇団道化は、福岡にあった複数の放送劇団(NHKのほか、民間放送局が創設した放送劇団がふたつ存在した)のメンバーが創立したもので、現在も活動を続けている<sup>10</sup>。また、同じく現在も定期的に公演活動を行なっている熊本市の劇団石も、その出自はNHK熊本放送劇団で、1965年に創設されている<sup>11</sup>。放送局は、地域によっては放送劇団のほか、児童劇団、合唱団なども創設しており、地方の実演分野の人材育成と活動に様々な影響を与えたものと考えられる。

鳥取の放送劇団は、1964年に解散するまでの10年間、ドラマやバラエティー、教育番組などのラジオ番組に出演した。声の出演を担当する「役者」だけでなく、放送に必要な「効果音」の募集もあった。のちに難波とともに市民劇場を立ち上げる佐藤方伯(1933-1997)<sup>12</sup>は、1953年に放送劇団に入り、主に効果を担当していた。1951年に第1期生が入団、解散前年の1963年まで募集を続け、解散する1964年6月1日付の名簿には総数35の名前がある<sup>13</sup>。男女同数を入団させてきた(1963入団は男5名・女6名)ので、解散時も男性17名、女性18名という構成だが、入団年の古い方に男性が多い。昭和20年代に入団し、この時まで活動を続けていたのが1期生の古

谷嘉彦、北村潔、松岡みどり（前田翠）、2期途中参加の難波、そして2期生佐藤の5人である。職業を見ると、教職7名、高校生・大学生7名、そのほか病院、公務員、電電公社、バス会社など大企業・公務員など、安定した職業につき、知的関心の高い層だったことがうかがえる。

難波自身は、前稿で示したように、1956年に日ノ丸自動車に就職し、1985年の定年までバスガイドの育成を仕事としていた。

## 2. 番組製作を通じた交流

放送劇団と演劇集団は、放送番組収録を通じて、密な交流があったことが、残された脚本から分かる。放送番組の脚本も、各地方放送局で多数創作・執筆されていた。鳥取では砂川のほか、鳥取の執筆者（LGライターグループ<sup>14</sup>）が脚本を執筆している。後にシナリオ作家として活躍する山根優一郎（1933-1986）も所属していた<sup>15</sup>。難波が所蔵していたラジオドラマの脚本には「ライターグループ研究用」と記されたものがあり、定期的に脚本執筆の勉強会も行われていた。このように、放送番組製作のために、出演者や脚本家が地元で育成されていた。演劇集団の代表となっていた砂川は、自分の劇団では既存戯曲の上演に徹し、自作のオリジナル脚本を上演することはなかったが、ラジオドラマの脚本を多数残している。

砂川、難波のほか放送劇団メンバーが所蔵保管していた脚本が、現在200冊ほど確認できており、そのうち38作品は翻刻のうえ報告書として刊行されている（岡村他2019）<sup>16</sup>。脚本には、配役や出演者が印刷、または手書きで追記されているものもあり、「鳥取放送劇団」と「鳥取演劇集団」、二つの「劇団」が共演していたことが分かる<sup>17</sup>。放送劇団はNHK本局の方針により、1964年に解散するものの、その後

も学校放送に使われる教材『社会科の時間』などをNHK鳥取放送局が引き続き制作しており、元放送劇団員や市民劇場、演劇集団のメンバーが出演した。このように放送劇団と演劇集団は、ラジオ放送時代から相互に交流があり、また放送劇団解散後もNHK鳥取放送局との繋がりがあった。この交流と関係性が、その後の特に1970年代の文化活動の広がり、80年代以降の市民参加による「市民劇」の盛り上がりにも影響を与えたと考えられる。

## 3. 舞台への抑えがたい情熱

放送劇団は、1953年に初めて舞台公演を行い、解散までの間に8作品を上演している（表1）。公演プログラムを見ると、毎回全員が参加していたわけではなく、有志による上演だったようだが、NHK鳥取放送局から経済的支援も得て実施されていた。難波は8作品のうち、2回目の『瓜子姫とあまんじゃく』を除く全てに参加しており、劇団代表者としていわゆる「制作」の役割も担っていた。県立図書館に収蔵されているスクラップブックには、公演の収支計画、公演の告知挨拶、後援依頼の文章、プログラム作成のためのレイアウト案、舞台図等が残っている。例えば、『悪魔の水車小屋』は総経費約10万円、収入の項にNHKからの助成2万円、広告料が19件で11,500円、入場料が800人で35,220円、赤字分は劇団員で負担という収支計画となっている。

誰もが聞くことのできるラジオ放送の性格を踏まえ、上演作品には広い層の人が楽しめるもの、家族で見られるもの、子ども向けのものなどが意識して選ばれた。そのほか『彼女は再び現れた』のように、当時すでに放映が始まっていたテレビドラマの脚本も上演された。この作品が放送劇団最後の舞台公演となり、翌年に放送劇団は解散する。ラジオからドラマへと放送の主流が変化していった転換点を象徴

表1：NHK鳥取放送劇団舞台公演一覧

	公演年月	上演作品	作	演出	会場	入場料	備考
第1回	1953年7月	おふくろ	田中千禾夫	難波忠男	図書館講堂	無料	勉強会
第2回	1954年	瓜子姫とアマンジャク	木下順二	清水光治	児童会館	無料	難波不参加:児童会館の記念行事の一つ・児童館が全費用を負担
第3回	1958年10月	幽霊やしき	福田恆存	関 収	遷喬小学校講堂	40円・20円	市制70周年記念(鳥取市補助金あり)・児童劇団出演
第4回	1959年10月	悪魔の水車小屋	シュートク・根津真訳	佐藤方伯	遷喬小学校講堂	50円・30円	
第5回	1960年11月	お前もまた美しい	八木隆一郎	関 収	遷喬小学校講堂	50円・40円 プログラム10円	NHK鳥取放送劇団創立10周年記念
第6回	1961年12月	よろこび	八田尚之	難波忠男	児童会館	無料	NHK鳥取放送局開局25周年記念
第7回	1962年3月	北風のくれたテーブル掛け	久保田万太郎	佐藤方伯	児童会館	無料	
第8回	1963年12月	彼女は再び現れた	菊村到	丹 泰彦	農協会館ホール	100円	

鳥取県立図書館所蔵資料より五島作成

することとなった。舞台公演の演出は、難波、佐藤、関収など劇団員が担当したが、最後の公演はNHKプロデューサー丹泰彦が担当している。

放送劇団の内外には「放送劇団が舞台公演をするのは邪道だ」「舞台とは発声、抑揚、間の取り方も違うのだから」「音の世界に生きておれば良い」という意見が多くあったらしく、公演プログラムには、「なぜ放送劇団が（放送だけではなく）舞台公演をするのか」について、当時の鳥取放送局長や担当ディレクターが繰り返し説明している。

例えば1958年の『幽霊やしき』では、局長の佐々木敬三が「放送劇団には日頃観客と云うものがない。つまり、自分が演技をしている瞬間、自分の演技がどう受けとられているかが分らない。演技者の醍醐味は、舞台の上からお客さんの目の輝きを自の演技の中で感じとることだとは、昔から云われている。所が、放送劇の反響を演技者が知るのはいつも自分の演技のすんでしまった後である。これ位わびしい事はない。

私はその意味でも放送劇団は時々舞台の上で生のお客さんの息吹きに触れることが必要だと思っている。」と述べ、1959年の『悪魔の水車小屋』でも稲田稔局長が、観客の反応があることで演技の勉強になるのだと説明している。

1961年になると、テレビドラマの放送が普及し始めているためか、吉沢光雄局長が「ラジオの声優が舞台上で直接皆さんにご批判を受けることは劇団員の技倆の成長に必要なものであり、特にテレビの出現によって、この必要性をますます痛感するものがあります」と、時代の変化の中での演技の重要性を訴え、最後の公演となった『彼女は再び現れた』でも、打出勇次局長が、「鳥取局にもテレビスタジオが出来、テレビドラマが鳥取放送劇団の手で作られるようになるのも夢ではない」ので、このようにテレビドラマの脚本をあえて舞台上で上演することには意味があるのだ、と訴える。テレビドラマの登場を見越して、演じ手の姿形が見える演技が求められるという認識が持たれていた。

このように、総じて言えば、演技力の向上のためには舞台公演が必要と説明されていたわけだが、実際のところは、「勿論、生のお客様との交流を願う理屈ぬきの気持ちも大きいわけですが」（第6回公演『よろこび』のプログラム）という難波の声が、劇団員の本音であったと思われる。観客の反応を直接得られる舞台への情熱を劇団員たちは共有していた。というのも、そもそも放送劇団には、高校演劇の経験者や、短期間に終わった劇団はまなすに所属して

いた人も少なくないからだ。はまなすは、1957年9月に「演劇を愛し、働くものの文化を生み出そうと、若い仲間が、手を握り、力強く進もうと」、30数人という大所帯で結成された。農協に勤務していた松本延夫が代表を務め、1958年に創立公演『つばくろの歌』（藤本義一作）を行っている<sup>18</sup>。放送劇団に参加し、のちの市民劇場創設メンバーとなる平家六榮もその一人だ。鳥取西高在学中に演劇部に入り、卒業後も演劇を続けたくて、はまなすに参加した。当時、演劇集団という劇団の存在は認識していたものの、入団しようとは考えなかったという。同世代の若者が勢いを持って新立ち上げる劇団に魅力を感じたのだ。また佐藤は、放送劇団に所属しながら、はまなすにも創設時から参加している。

リーダーであった松本が劇団わらび座に入るため秋田に行ってしまう、はまなすはわずか3年ほどで解散してしまう。1963年の放送劇団名簿とはまなすの公演プログラム「劇団員連名」を付き合わせると、前出の佐藤、平家（放送劇団1959年入団）、他に、稲田雄二郎（1956年入団）、松本寿恵（1961年入団）などが、はまなすを経て放送劇団に入団している。このように放送劇団は、演劇表現に携わりたい若者たちの受け皿でもあった。したがって、舞台公演の実践は、放送劇団員の技量向上に必要という教育的な意味合いを超えて、劇団員にとってはごく必然的な流れだった。

ところで、実際の上演の出来栄えはどのようなものだったのだろうか。残念ながら当時の上演記録は、写真のみだが、難波のスクラップに後記事が一件残っていた。1963年の『彼女は再び現れた』について、中学校教諭の疋田邦夫が書いている<sup>19</sup>。疋田は、作り込まれた舞台セットは目を見張るほど見事だったと褒めているが、上演内容と役者の演技については手厳しい。30分のテレビドラマ用の脚本を50分ほどに引き伸ばした上演は冗長であった。またテレビの画面割りを前提とした心理描写を、大きな舞台で役者が表現するのは無理があったようだ。加えて、マイクで音声を拾う放送と違い、生の声を客席に届けなくてはならない舞台公演では、声量の問題もあった。ラジオと舞台での演技には懸隔の違いがあると評している。しかし、その中で難波が演じた役についてのみ、一言「文造はおもしろかった。」とあり、それまでの経験を踏まえたひときわ目立つ役者ぶりうかがえる。

鳥取放送局長が「テレビドラマが鳥取放送劇団の手で作られるようになるのも夢ではない」と期待を語ったものの、鳥取の放送劇団がテレビドラマのた

めの劇団へ発展することはなかった。1965年春に劇団解散となった後、有志が集まり、最年長であった40歳の難波が代表につく形で劇団「鳥取市民劇場」が結成される。こうして、ふたつ目の劇団が放送劇団を契機に生まれた。

演劇について学ぶ場や指導者が不在していた地方都市では、放送というメディアの誕生と放送局という機関の設置が、演劇に限らず地域文化の創造を担う人材の育成に大きな影響を与えたと推察される。鳥取のような放送劇団を母体として生まれた劇団の活動については、演劇雑誌などで散発的に事例報告がされているものの<sup>20</sup>、管見の限りでは、放送劇団と地域演劇の発展に関する包括的な研究は確認できていない。NHKなどの放送局が放送番組製作のために各地で創設した劇団が、地方都市において俳優、脚本家、舞台技術者などの育成機関となった例は少なくないと思われる。

### Ⅲ. 鳥取市民劇場の創設と盛衰

#### 1. 劇団名に込められた意味

1965年7月の市民劇場誕生後、難波は1996年9月に病で亡くなるまでの31年間、劇団代表として、辛抱強く劇団を担い舞台に立ち続けた。

劇団に「鳥取市民劇場」という、現在から顧みると「公的な」印象の、少し漠然とした名前が付けられたのは、実は母体が放送劇団であったからだ。名付け親は、創設メンバーの一人、佐藤である。市民劇場創立20周年記念公演『名医先生』のプログラムで佐藤は、「茶の間で家族みんなに楽しんでもらえるドラマ作りを志向していた放送劇団の演劇活動を引き継ごうとする、我々の集団の名称はこれをおいてほかにないと考えた」と振り返る。劇団創設の契機が、放送劇団の解散であっただけでなく、ラジオ放送という出自が、新しい劇団の名前には反映されていた。難波が代表として市民劇場の歴史を振り返る際に、必ず放送劇団に言及する理由はここにあった。

市民劇場は創設時に、全8条の規約を定めており、ことあるごとにプログラムに記載し、また新入団員にそれまでの公演記録とともに劇団の活動指針として渡していた。規約の第2条「目的」は、「この劇団は、演劇活動を通じて地域文化に寄与することを目的とする」である<sup>21</sup>。難波らは、劇団創設の当初から演劇活動に社会的な広がりや社会的責任を認識していた。

さて劇団は立ち上げたものの、しばらくは具体的

な活動につながらなかった。NHKという後ろ盾がなくなり、全てを自主的に進めていかねばならない。しかし、稽古場所の確保、働きながらの練習時間の捻出など課題は多かった。初めての上演は劇団を結成してから、2年以上が経過しており、放送劇団に所属していたメンバーは難波、佐藤、平家の他数名を除いて、ほぼ新しい人に入れ替わった。そして、上演は子ども向けの作品から始まった。初回公演から、難波が亡くなった1996年までの市民劇場の上演記録一覧を表2-1及び表2-2に示した。表中「上演」欄の「●」は、難波が役者として舞台に立ったことを示している。

子ども向けの作品上演は、新しいメンバーのための演技の基礎固めという理由のほか、練習場所の確保という切実な問題と絡んでいた。人形劇団こうま座（注12参照）の代表も務めていた佐藤は、自身の経験から、子どものための文化活動を実践すれば、市立児童会館を稽古場所や発表会場として利用できるように館長が配慮してくれることを知っていた<sup>22</sup>。もちろん放送劇団時代にも、子ども向けの作品を上演しており、市民劇場の目的にも沿ったものだった。劇団初の上演は、児童会館のクリスマス大会の1プログラム『彦市ばなし』だった。

その後も児童会館で子ども向けと「勉強会」という名称での上演を重ねた。劇団としての本格的な演劇上演は、5年後1970年のアガサ・クリスティ作『そして誰もいなくなった』を待たねばならなかった。その上演の出来は、難波の文章を読む限り惨憺たるものだったようだが、「これより下はない」という自虐的なほどの謙虚さを基盤にした努力と、後述するような他劇団との交流を重ねながら、定期的な公演を行う劇団に育っていく。

#### 2. 県内の他劇団との交流—草創期

市民劇場の上演の質については、「よちよち歩きから上達しない」と、難波は繰り返しこぼしているのだが、それは強い向上心の裏返しでもあった。

第1回定期公演（1970年7月）後すぐの10月10日には、「第1回3市劇団合同公演」と銘打って、倉吉市のざっこ（代表尾嶋政幸）<sup>23</sup>、米子市の座・ユリイカ（代表別所清平）<sup>24</sup>と、鳥取県内東中西部3市の3劇団が、それぞれの作品を持ち寄り米子市公会堂で合同公演を実施した。これに先立つ1969年11月、座・ユリイカとざっこの2劇団が交流公演の機会を持ち、倉吉福祉会館で上演している。そこで鳥取市の劇団を誘う案が持ち上がり、ざっこと座・ユリイカからの呼びかけに、市民劇場が参加を表明、倉吉、

米子、鳥取と実行委員会を持ち回りしながら、第1回目の3市合同公演が実現することになった<sup>25</sup>。

公演プログラムには、別所の意気込みに満ちた長文が掲載されている。別所も、東京で演劇活動に携わった経験があり、地方の劇団が集まって上演するのは、東京という都市に優れた演劇活動が一極集中している状況への抵抗であると宣言する。地方都市で同じ志を持つ「同胞」とともに公演機会を持つことで、発表の機会、集客を確保するという実利的な効果の一方、3者3様のそれぞれ独自の演劇作品を見せることが、地方都市の演劇環境を豊かにするものだ、と力強く語る。

上演後、3劇団のメンバーたちは大山に集結し大交流会を開催しており、難波のスクラップに残された多数の白黒写真がその熱気を伝えてくれる。難波はこれらの劇団員たちの中ですでに最年長であったが、なんとか舞台公演を行えるようになった市民劇場劇団員を鼓舞し、劇団員の研鑽・技術向上のためにも、難波自身が仲間を必要としていた。

県内アマチュア劇団の交流はさらに広がっていく。翌1971年9月には、鳥取演劇集団も加わり鳥取市で第2回目の3市合同公演が開催される。9月24日付の新聞記事(誌名未確認)「三市劇団公演に当たって」で、難波は「それぞれの集団が自分自身を啓蒙するなかで、お互いを刺激し、啓蒙される結果を生み出すことになり、一歩ずつ前進してゆくことができる」と仲間の必要性を訴える。また、公演プログラムには「とかくセクト主義の中で必要以上に孤立しがちな地方の演劇集団が、しかも物理的にもハンディのある中で、一堂に会して公演を持つということは、それだけでも大きい意味を持つものと言えましょう。

更に、中央集権的な演劇の世界で、職業演劇にない何かを求めてお互いに批判し合い、前進しようという努力は、アマチュア演劇の持つ特権であり、宿命でもあります。」と述べている。

この頃、砂川が東京転勤で不在にしていたこともあり、演劇集団のほうも、劇団員数は減少し定期公演は一時期途絶えている。演劇集団所属の萬井一夫は、劇団民芸の退団騒動を例に引きながら、地方のアマチュア劇団はそもそも団員数が少なく貴重なので、どのような理由であっても一人でも失うことはできないと書く<sup>26</sup>。この合同公演では、演劇集団と市民劇場の劇団員が一緒にひとつの作品『パレスチナのサボテン』を作り上演した。実働の劇団員数が、双方ともに貧弱であり、共同で作品を作るほかなかったのである。

この年、倉吉市のざっことは創立10周年を迎え、これらの劇団が12月には、倉吉福祉会館でも同じ作品を上演した。1年に2回も合同公演を行なっていることになる。高速道路もなく、自家用車を持つ人も少なく、その当時3市間の移動にはかなりの時間を必要としたはずだ。舞台道具の運搬にも労力を要したと思われるが、こうした距離や手間を厭わない交流の盛り上がりがあった。アマチュア劇団の数の少なさ、その孤独を反映してか、県内劇団の濃密な交流が契機となって2年後に「鳥取県演劇連盟」が生まれる<sup>27</sup>。

市民劇場は、劇団員の獲得には苦戦した。公演プログラムの「劇団連名」に記載された名前と、実働の人数には乖離が大きかったようだ。団員数の変化を難波が時々、プログラムなどに記載しているが、その数字にも幅がある。正確な団員数を把握するのは難しいが、配役数なども参考にすると以下のような状態だったと考えられる。1968年から70年の団員数は二桁(20人弱)だったが、71年から76年あたりは7-10人となり、キャスト数の少ない作品で定期公演(1971年『班女』は出演者3人)を実施、1972年は演劇集団から客演を招き、短編2編『人を食べた話』・『釘』を上演している。演劇集団も1972年は、独自の公演を持つことができていない。団員数は少ないがとにかく「年に1回の公演の灯は決して消してはならないという劇団員の固い決意」によって公演を実現させたと、難波は必死の思いをのぞかせている。公演プログラムの挨拶には、1969年に創設された鳥取労演の運営委員長伊藤栄が、「地方の自立劇団の維持運営は、難しい。稽古場がない、人がいない、ゼニがない、と劇団を支える肝心な条件をみたさ」ず、これを「三無の桎梏」と名付け、そのような中で演劇上演を続けようとする難波らにエールを送っている。『班女』は、劇団の第4回公演と銘打たれているものの、鳥取市内の3団体の合同企画であり、演劇集団の公演、「蘆の会」の詩の発表(朗読を演劇集団と市民劇場の俳優が行う)とモダンバレエの小作品を上演するものだった<sup>28</sup>。73年の上演『天国の遠征』も、蘆の会との合同企画で、引き続き演劇集団の林正人が客演で参加している。蘆の会にとっても、朗読による詩の発表と池田正子の教室によるモダンバレエの小作品の発表では、イベントとしての規模は小さいため、合同の公演・発表は双方にとって、宣伝や集客上のメリットがあった。

そのほかにも、1976年は勉強会として短いコント集(井上ひさし原作)の上演、また、10年近く不在ののちついに帰郷した砂川の演出による演劇集団の公

演『夜の来訪者』に参加するなど、県内の劇団ほか文化団体との交流と連携を深めることによって、なんとかやりくりしながら上演活動を続けている。

### 3. 充実発展期を迎える

1970年代後半から1980年代前半が、難波が代表を務めていた期間中、市民劇場が最も充実していた時期である。市民劇場で主に演出を担っていた佐藤が、米子転勤で1975年から劇団を不在にしていたが、3年で鳥取に戻ってきた。また、鳥取市の美術・音楽・演劇関係の団体が集まって、オリジナル脚本・音楽による『ミュージカル湖山長者』（古谷嘉彦演出）を共同製作・上演する計画が立ち上がり、この機会に市民劇場は参加者を募集し演劇講座を開くこととした。『湖山長者』は1978年11月に鳥取市民会館で上演され、この公演前後から、団員数も少し盛り返す。1983年の演劇連盟10周年記念公演あたりまで、市民劇場には20名弱が名前を連ねた。劇団の2代目代表となる伊藤勝も、演出を担当した高校教諭古谷に誘われて上演に参加、その後市民劇場メンバーとなっている。

『湖山町者』の企画上演のように、複数の団体や個人が参加して実行委員会を立ち上げ、特に地元の伝説・歴史などを素材にしたオリジナル脚本を創作し、公募で出演者を広く募って上演する舞台公演を、ここでは「市民劇」と呼んでおく。「市民劇」は、劇団の定期公演と異なり、演劇への参加のハードルも低く、劇団への「体験入団」の機会ともなり、結果としてアマチュアの演劇活動を活性化し、新たな劇団参加者の発掘に繋がっている。このような市民劇に、『渴殺・鳥取城』（1982年・須崎俊雄作・砂川演出）、『鳥取有情』（1985年・須崎作・砂川演出）、『おとんじょろ狐』（1989年・鷺見貞雄作・難波演出）、『共斃社始末』（1994年・仲市實作・難波演出）などがある。砂川や難波などアマチュア劇団の主宰や劇団員が、演出・出演のほか舞台を成立させる主要なメンバーとなって参画している。演劇集団と市民劇場はどちらも、劇団オリジナルの創作脚本による上演を行うことはなかったが、市民劇は鳥取在住の書き手によるオリジナル戯曲であることが大きな特徴のひとつである。鳥取におけるこれら市民劇の系譜と意義については、稿を改めて論じる。

市民劇場の活動に話を戻す。劇団員も充実し、春は新人を中心とした「勉強会」で試演会や実験的な作品を取り上げ、秋には劇団の定期公演を行うという上演パターンが可能となった。年間の上演作品数も増え、1979年には創立15周年記念公演・第10回

定期公演『招かれざる客』を10人のキャストで上演、その後、81年は5作品、82年は市民劇『渴殺・鳥取城』も含めて5作品を上演するなど、質、量ともに充実している。1983年には、鳥取県演劇連盟の参加劇団（鳥取演劇集団、鳥取市民劇場、座・ユリイカ）が共同でひとつの作品『オイディプス』を製作し、鳥取と米子で上演するという特別企画が実施された。3劇団から芸達者の役者たちが、鳥取米子間の距離100キロを超えて稽古を続け共演した。上演記録のビデオ映像からも充実した公演の様子がうかがえるが、そのあたりを境に、市民劇場の活動はややエネルギーを失っていく。劇団員の結婚や仕事、子育てなどライフステージの変化を迎え、主要なメンバーの参加が難しくなっていく。

1985年は、出演3人の『薔薇のベビィ』1作品のみの上演で、定期公演は行われていない。1986年11月は創立20周年記念公演として『名医先生』を上演した。公演プログラム最終ページ「劇団員連名」には、17人の名前が記載されている<sup>29</sup>。しかし、配役のある劇団員の自己紹介を読むと、数年ぶりに舞台に立ったというメンバーが数名、東京から戻って公演に参加した元メンバーもあり、この時すでに同窓会的な公演であったことが分かる<sup>30</sup>。また、20周年記念公演を契機に、仕事が多忙となった佐藤が市民劇場の活動から遠ざかっており、演出家の不在も活動の停滞の一因となったと思われる。

### 4. 新風と世代交代

1987年は、かろうじて試演会『樺の木の下で』と定期公演として『たつのおとしご』を難波が演出し上演している。そして1988年以降の定期公演は、劇団「芝居屋でこにた」との合同公演となる。

でこにたは、演劇集団、市民劇場で活動している20,30代の若手メンバーが、それぞれの劇団に所属したまま1983年4月に立ち上げた劇団だ。代表の中島健造は、県外の就職先から帰郷後、1980年ごろに市民劇場に入団する。鳥取工業高校演劇部出身で、自身と同じようにUターンした高校時代の演劇部仲間を市民劇場に入団するよう誘ってもいる。

でこにたは、男5名女5名、平均年齢23歳の若いメンバーで創設された。中島は「若者じゃないと出せないものを小さなホールで型にはまらず力いっぱい演じてみたい、という気持ちが盛り上がり、仲間に相談したところ、私もしたいという人がけっこういたこと」、そして富士書店が気軽に使える「アゴラとっとり」を無料提供してくれたことで弾みがついて、劇団を結成した<sup>31</sup>。



表2-1 鳥取市民劇場 公演一覧 「鳥取市民劇場20年のあゆみ」「鳥取市民劇場30年のあゆみ」より五島作成

作品タイトル	作	上演日	会場	演出	位置付け	出演
彦市ばなし	木下順二	1967/12/24	児童会館	佐藤方伯	児童会館クリスマス大会	●
どろぼう仙人	津島昇	1968/11/3	鳥取市民会館	佐藤方伯	市民文化祭子ども劇場	●
でたらめ歯医者	村山亜土	1968/12/22	児童会館	難波忠男	児童会館クリスマス大会	●
和尚さんと小僧さん	木下順二	1969/3/2	児童会館	佐藤方伯	児童会館ひなまつり大会	●
彦市ばなし 友情	木下順二 デ・フィリポ・里居正	1969/7/10	児童会館	柴田和晃 小山正樹	試演会	●
ベルトコンベア	劇団青年部	1969/12/7	日進小学校体育館	小林陸夫	鳥取市青年大会	
そして誰もいなくなった	クリスティ作 内村直也翻案	1970/7/13	鳥取市民会館	佐藤真佐紀	第1回定期公演	●
荷物	椎名麟三	1970/10/10	米子市公会堂	佐藤真佐紀	第1回3市劇団 合同公演	●
巴鼻庵物狂い	田中千禾夫	1970/11/9	鳥取市民会館	小谷伶	関収氏追悼公演 蘆の会 (第4回) 発表会協力 (有志参加)	●
荷物	椎名麟三	1970/11/24	商業福祉センター	佐藤真佐紀	第2回定期公演	●
コントWhat's your name?	難波忠男構成	1971/2/14	農協会館	難波忠男	労演まつり参加	●
パレスチナのサボテン	矢代静一	1971/9/25	鳥取市民会館	伊藤彰彦 (鳥取 演劇集団)	第3回定期公演 第2回3市劇団合同公演	●
彦市ばなし	木下順二	1971/11/14	鹿野小学校講堂	佐藤方伯	鹿野町文化祭参加	●
班女	三島由紀夫	1971/11/26	鳥取市民会館	渡辺紀雄	第4回定期公演	
パレスチナのサボテン	矢代静一	1971/12/12	倉吉福祉会館	伊藤彰彦 (鳥取 演劇集団)	ざっこ10周年記念公演参加	●
コント 死刑	井上ひさし	1972/9/17	商工会館別館	佐藤真佐紀	第2回労演まつり参加	●
人を食った話 釘	宮本研 飯沢匡	1972/11/22	鳥取市民会館	難波忠男・佐藤	第5回定期公演	●
天国への遠征	椎名麟三	1973/11/15	鳥取市民会館大 ホール	佐藤方伯	第6回定期公演 (市民劇場・葦の会合同公演)	●
この水や君の器に	今井良春	1974/11/3 1974/11/18	米子市公会堂 鳥取市民会館	渡辺紀雄	米子: 第1回鳥取県演劇連盟文化祭・第1回鳥 取県演劇連盟合同公演 鳥取: 第7回定期公演	●
夜の来訪者	ブリーストリー・内 村直也訳	1975/10/11 1975/10/12	鳥取市民会館	伊達修 (砂川哲 夫)	第2回鳥取県演劇連盟合同公演 第2回鳥取県演劇連盟文化祭	●
きんきらきん・高層ビル改造 論・四つん這い 冬の雷	井上ひさし 村越一哲	1976/3/19	商業福祉センター	難波忠男	勉強会	
デュデュールカインフレカ	ジュルジュ・フルニエ	1976/11/14 1976/11/23	米子市公会堂 鳥取市民会館	難波忠男	米子: 第3回鳥取県演劇連盟合同公演・第3回 鳥取県演劇連盟文化祭 鳥取: 第8回定期公演・鳥取演劇集団・鳥取市 民劇場合同公演・'76市民文化祭参加	●
異聞一寸法師	矢代静一	1977/11/25	鳥取市民会館	難波忠男	第4回鳥取演劇連盟公演 (東部地区) 第9回定期公演	
宮城野 を訪ねて3千里	矢代静一 黒川欣映	1978/10/22	商工会館別館	佐藤真佐紀 平井知行	勉強会 (『30年のあゆみ』では、会場が市民 会館と記載されている)	
ミュージカル湖山長者*	古谷喜彦	1978/11/27	鳥取市民会館	古谷喜彦	第5回鳥取演劇連盟東部地区公演? 鳥取県芸術祭プログラム	●
花散野	宮崎友三	1979/4/22	福祉文化会館	難波忠男	勉強会	
招かれざる客	アガサ・クリスティ	1979/10/11	鳥取市民会館	佐藤真佐紀	第10回定期公演 鳥取市民劇場創立15周年記念公演	●
雪夜の客	竹内勇太郎	1979/12/1	鳥取市民会館	佐藤真佐紀	第6回鳥取演劇連盟公演 (東部)	●
楽屋 熊	清水邦夫 チェーホフ	1980/4/26	社会教育センター	佐藤真佐紀 難波忠男	勉強会	
ブラック・コメディ	ピーター・シェー ファー・倉橋健訳	1980/9/27	鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	第11回定期公演	●
結婚の申し込み	原作チェーホフ 翻案伊賀山昌三	1980/12/6	鳥取市民会館	入江洋司	第7回鳥取演劇連盟 (東部) 公演	●

表2-2 鳥取市民劇場 公演一覧（続き）

作品タイトル	作	上演日	会場	演出	位置付け	出演
ひさし笑劇場 変な話	井上ひさし	1981/3/8	鳥取市文化ホール	難波忠男	第1回鳥取市青年芸術祭	
妖かし	矢代静一	1981/5/10	社会教育センター	佐藤真佐紀	実験劇場	●
宮城野を訪ねて3千里	矢代静一	1981/8/22 1981/8/23	松風閣（皆生） 鳥吉（鳥取）	別所清平・佐藤方伯	2人会公演	
7本の色鉛筆	矢代静一	1981/10/4	鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	第12回定期公演	
班女	三島由紀夫	1981/11/22	鳥取市文化ホール	渡辺紀雄	第8回鳥取県演劇連盟公演（東部地区）	
妹	大橋むつお	1982/3/21	鳥取市文化ホール	中島健造	第2回鳥取市青年芸術祭	
頼朝の死	真山青果	1982/5/23 1982/5/30	米子市公会堂 鳥取市文化ホール	別所清平・佐藤方伯	座・ユリイカ15周年記念公演 協力	●
トレヴァー	ジョン・ボウエン	1982/9/26	鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	第13回定期公演・市民文化祭参加	●
彼女は再び現れた	菊村到	1982/11/23 1982/12/5	米子市公会堂 鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	第9回鳥取県演劇連盟公演	●
ひさし笑劇場	井上ひさし	1983/3/20	鳥取市文化ホール	中島健造	第3回鳥取市青年芸術祭 参加	
楽屋	清水邦夫	1983/5/29	鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	第10回鳥取県演劇連盟公演	
オイディプス王	ソポクレス	1983/11/20 1983/12/3	鳥取市文化ホール 米子市公会堂	別所清平	鳥取県演劇連盟創立10周年記念公演	●
幽霊やしき	福田恒存	1984/8/5	社会教育センター ホール	中島健造	第14回定期公演	●
棒しばり	井関義久	1984/11/25	鳥取市文化ホール	中島健造	第11回鳥取県演劇連盟公演	
薔薇のベビィ	大和雪彦	1985/6/16	鳥取市文化ホール	難波忠男	第12回鳥取県演劇連盟公演	
名医先生	ニール・サイモン	1986/11/23	鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	創立20周年記念公演 第15回定期公演	●
樺の木の下で	岩間芳樹	1987/6/28 1987/7/19	米子市公会堂 市民コミュニティ	伊藤げん	米子：第13回鳥取県演劇連盟公演参加 鳥取：試演会	●
たつのおとしご	真船豊	1987/12/13	鳥取市文化ホール	難波忠男	第16回定期公演	
貧乏神物語	御荘金吾	1988/7/3	鳥取市民会館	難波忠男	第14回鳥取県演劇連盟合同公演	
雪をわたって	北村想	1988/12/11 1988/12/25	鳥取市文化ホール 鳥取大学	村上篤哉	第17回定期公演 大学セミナー	●
日曜は罪よ	岡田晃吉	1989/5/21	鳥取市文化ホール	村上篤哉	第15回鳥取県演劇連盟合同公演（東部）	●
桃鶯記	南勝彦	1990/5/27 1990/6/3	米子市公会堂・県民ふれあい会館	村上篤哉	第16回鳥取県演劇連盟公演（西部地区）・（東部地区）	●
スケッチブック・ボイジャー	成井豊	1991/3/17	鳥取市文化ホール	村上篤哉	第18回定期公演 鳥取市民劇場・芝居屋でここに合同公演	●
不審尋問	黒川欣映	1991/5/26	鳥取市文化ホール	難波忠男	第17回鳥取県演劇連盟公演	●
昨今横浜異聞	岸田国土	1992/5/24 1992/6/21	鳥取市文化ホール 米子市文化ホール	難波忠男	第18回鳥取県演劇連盟公演（東部地区・西部地区）	
太陽のそばの12月	安田光堂	1992/12/13	本通りパーキング	村上恭一 難波忠男	第19回定期公演 鳥取市民劇場・芝居屋でここに合同公演	●
棒しばりーあれから10年	井関義久	1993/5/23	鳥取市文化ホール	難波忠男	第19回鳥取県演劇連盟東部地区公演	
薔薇のベビィ	大和雪彦	1994/5/22	鳥取市文化ホール	村上久子	第20回鳥取県演劇連盟東部地区公演	
不審尋問	黒川欣映	1994/6/5	米子市文化ホール	村上久子	第20回鳥取県演劇連盟創立20周年記念公演	●
忍冬	須見百合子	1994/11/3	県民文化会館梨花ホール	砂川哲夫 池澤正子	文化庁芸術祭鳥取公演 第1回県民文化祭	●
十二人の怒れる男	レジナルド・ローズ	1994/12/4	県民文化会館小ホール	村上恭一	鳥取市民劇場・芝居屋でここに合同公演	●
広くてすてきな宇宙じゃないか	成井豊	1995/5/21	鳥取市文化ホール	難波（実際には全員で）	第21回鳥取県演劇連盟公演	
夜曲 ノクターン	横内謙介	1995/11/3	鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	第20回定期公演 鳥取市民劇場・芝居屋でここに合同公演	
結婚の申し込み	伊賀山昌三：翻案 A.チェーホフ原作	1996/3/24 1996/5/26	日野町文化ホール 鳥取市文化ホール	村上恭一	第2回鳥取県民文化祭演劇公演 第22回鳥取県演劇連盟公演	
そして誰もいなくなった	A.クリスティ原作 内村直也翻案	1996/11/3	鳥取市文化ホール	佐藤真佐紀	鳥取市民劇場創立30周年記念公演 第21回定期公演	

東京や関西で 1980 年代の小劇場運動の薫陶を仰いだ世代が、家庭の都合などで帰郷し、地元の演劇活動に影響を与えていく。帰郷した彼らは、高校演劇部時代の先輩や知人に誘われて、演劇集団や市民劇場といった地元の劇団にひとまず所属する。演劇連盟での共同製作による合同公演や、「市民劇」に参加すると、市民劇場と演劇集団といった劇団の枠を超えて、共同作業をしながら交流する機会は多く、やがて自分たちの感覚にあった新しい演劇活動に向かって意気投合する、というのは必然的な流れだったように思われる。

でこにたの上演作品は、北村想、鴻上尚史、つかこうへいなど、70 年代以降のいわゆる小劇場運動の作家たちの作品である<sup>32</sup>。特に、数十人も観客が入れば満杯になるような小さな会場（現在はいずれの会場も無くなっているが、アゴラとっとり、TALK-616、本通パーキングコミュニティセンターなど、商業ビルのワンフロアが公演会場となった）での上演は、それまでの演劇集団や市民劇場の公演にはない特色と魅力があった。

1980 年代後半、市民劇場は、若い人たちの演劇活動とパートナーを組んで生き延びることとなった。難波は、でこにたとの合同公演では、もっぱら一出演者である。1988 年は北村想作『雪をわたって』、1991 年は成井豊作『スケッチブック・ボージャー』、1992 年は安田光堂作『太陽のそばの 12 月』など、若者たちの人気を集めた作品を上演する。『雪をわたって』上演時、難波は 63 歳である。これら 3 作品を創作し上演した若手劇団（順に、プロジェクト・ナビ、キャラメルボックス、そとばこまち）に、63 歳の劇団員はいなかったはずだ。難波の柔軟さが、でこにたとの共同作業を可能にしたとも言えるが、「蛇に魅入られて動けなくなったように」、人前で演じることの面白さから終生逃れることができなかった難波にとって、どのような舞台であれ、最期まで人前で演じたいという強い執着の結果でもあったろう。難波に子どもはいなかったが、いたとすれば、自分の子ども世代よりもさらに若い人たちと一緒に、小さな空間で、奇抜な衣装を纏い荒唐無稽ともいえる物語に参加した。上演の記録映像には、飄々と演じている姿が残されている。

難波が代表を担った劇団「鳥取市民劇場」は、地域との連携を劇団の活動方針に掲げ、演劇を志す複数の劇団仲間と切磋琢磨し、劇団を超えて（時には演劇以外の文化活動団体とも）相互に支えあいながら活動を生き延びさせてきた。そこには、座右の銘を「辛抱」とする難波の包容力と忍耐強さがあった。

## IV. 地域の文化環境への貢献

### 1. 観客を育てる—「労演」の創設

難波ら市民劇場が地域文化に貢献するための活動として、力を入れたもののひとつに「演劇鑑賞会」がある。現在では、全国各地に公立のホールがあり、運営する自治体や財団が自主事業として、優れた舞台の鑑賞機会を市民に提供するために、東京からプロの演劇やミュージカルなどの舞台作品を招聘することは一般的だ。しかし、1950 年代まではこのような上演施設も乏しく、また招聘組織も地方都市にはなかった。戦後の新劇運動とも相まって、1960 年代には各地に「労演（勤労者演劇協議会）」や「労音（勤労者音楽協議会）」など会費制の演劇・音楽鑑賞団体が生まれていく。

鳥取県内では、先に米子に「米子労映演」という鑑賞組織が設立されていた。鳥取市では、三洋電機や保険会社などに勤務する転勤族から、県庁所在地にもかかわらず、「労演もない」、「文化的なものに触れられない」という不満の声があり、中には米子労演の会員になっている鳥取市民もいたという。

難波ら市民劇場にとっても、優れた舞台を身近で鑑賞できること、全体として演劇の観客が増えることは地域の文化振興に重要なことだと考え、早くから「労演」の設立を働きかけていた。日本海新聞社で文化部長を務めていた伊藤栄（後に労演の運営委員長）や他の団体とも協力し、労演がグループ単位の加入と会費によって運営されることから、損保や農協、銀行、病院などの職員組織に声をかけて、設立準備を進めていった。こうした企業の職員団体や労組への働きかけは、市民劇場の平家ももっぱら担っていた。市民劇場の公演チラシやプログラムにも、「労演」の設立呼びかけや、設立後の「労演」会員拡大のローガンが掲載されている。

1969 年 12 月に「鳥取勤労者演劇協議会（鳥取労演）」は創設され、平家は初代事務局長につき、その後も 1987 年まで役職は変わりながらも、労演の運営に携わった。また難波は 1971 年から亡くなるまで副会長を務め、例会で招聘する劇団・作品の紹介を新聞に時折執筆・寄稿している。招聘する劇団には、東京時代にともに汗を流した仲間や、舞台芸術学院の同窓生が参加している作品も少なくなかった。

創設初期の 71 年、72 年には、労演の盛り上げ、会員拡大、演劇の観客拡大のために、労演の会員団体などが集う「とっとり労演まつり」といった催しが行われた。各企業や職場の会員団体や文化サークルなどが出演し、音楽や芸能を披露したり、飲食の

屋台を出す「文化祭」のようなものである。市民劇場は、短いコント作品の上演を行なっている。他に舞台プログラムとしては合唱団、労組のパフォーマンス（どじょうすくい）、病院の銭太鼓、青年団の芸能披露などが行われ、絵画、写真、書道といった作品展示もあった<sup>33</sup>。労演の例会で上演予定の劇団「わらび座」から劇団員2名が、集客活動のいっかんとして「秋田おばこ」を披露するなど、労演にとっては、会員の交流・拡大のためのイベントであり、市民劇場にとっては貴重な舞台発表の機会ともなった。

1974年、「労働者」「勤労者」に限らず、幅広い層の市民に鑑賞機会を提供しようと、労演組織では全国的に名称改正が進んだ。多くの「労演」が、「地域名＋市民劇場」という名称を選択したが、鳥取にはすでに、「鳥取市民劇場」があったため、鳥取の労演は「鳥取演劇鑑賞会」という名前に改称することとなった<sup>34</sup>。

労演は1972年ごろから、活動のひとつとして「おやこ劇場」の創設にも取り組んでいる。鳥取市内で子ども向けの文化活動を行っている団体や、女性の団体と連携し創設を働きかけていった。そこには、佐藤が代表を務めていた人形劇団こうま座とそのメンバー、また市民劇場に所属していたメンバーも参画していた。以上のように1970年代初めは、市民劇場劇団員らが、劇団の上演活動だけではなく、地域の様々な組織・団体と共同・連携しながら、鳥取の文化環境を醸成していくための活動に邁進していた。

## 2. アマチュアを極めるー「ひまわりの会」

鳥取演劇鑑賞会が、創立22年を迎えるにあたり、会の活性化と、会の存在をアピールすることを目的に、舞台作品を作って上演することになった。舞台作品を招聘する鑑賞会が、あえて作品を製作上演することについては、鑑賞会の内部でも議論があったが、1990年9月に実施が決まり、朗読劇『この子たちの夏 1945 ヒロシマナガサキ』を上演することになった。この作品は地人会（演劇企画制作団体）を主宰する演出家木村光一（1931-）が、被曝体験を綴った遺稿、手記、詩歌などの資料から特に「母と子」をテーマに文章を集め、朗読劇として構成した作品である。被曝40年となる1985年の初演以来、全国各地で上演されていた<sup>35</sup>。

地人会が1990年から、自らの企画公演だけではなく、脚本を公開して全国に自主上演を呼びかける活動を始めた。上演にあたっては、脚本のほか、映写投影するスライド、効果音CDの貸出も行っていった。地人会としては、他団体に作品の趣旨に沿った上演

を実現してもらうための工夫であったが、アマチュアの団体にとっては取り組みやすい仕掛けであった。

演劇鑑賞会は1990年のうちに、地人会から上演許諾を得ることができ、会員向けの会報「演劇界限」で告知したところ、早速出演したいという反応があった。年が明けて新聞に取り上げられるとさらに応募があり、地人会の脚本では出演者6人だったが、最終的に16人が出演を希望した<sup>36</sup>。1991年2月2日に第1回実行委員会が鳥取演劇鑑賞会事務局で開催される。演劇連盟の中心人物として砂川が参加していたが、多忙のため演出ではなく総監督としてバックアップするということになり、演出は鑑賞会の副会長であった難波が引き受けた（1991年2月4日議事録）。

出演者が16名となったので、一部セリフを分割して1回8名の出演者で昼夜2公演上演することとした。年齢は20代から60代まで、「母」だけでなく独身女性も、また遠く米子から参加する女性もいた。これまでにない取り組みだったこと、舞台経験のない主婦の朗読公演ということで、新聞には何度も記事が掲載されている。これらによれば、稽古中、感情移入した出演者が思わず泣き出してしまうこともしばしばあったという。また、難波は「被曝した市民が書いたものだから、本職の女優さんでは出ないものが、お母さんたちなら出せるかもしれない。「こんなことが本当にあっているのか」とストレートに感じたものがそのまま出るかも。この可能性を高めるために練習してきた」と取材に答えている。

難波は、朗読の指導・演出のみならず、持ち前の緻密さで、照明プラン、箱馬や平台を組み合わせた舞台装置など詳細にメモを書いている。

上演は、「鳥取演劇鑑賞会自主公演」として、8月7日水曜日昼2時からと夜6時半からの2回、鳥取市文化ホールで行われた。地方の演劇鑑賞会が自ら作品を製作し、チケットを売って会員以外にも公開上演するというのは、鑑賞会の一般的な活動スタイルではない。鳥取市の演劇鑑賞会の創立・運営に、多くの演劇実演者が参加していたこと、またこれらの団体のネットワークが密であったことが、このような作品の製作上演を可能にしたと思われる。

1991年の上演を機に、参加メンバーは「ひまわりの会」を発足させた。教員であった竹内和子が代表となり、引き続き難波の指導を得ながら、毎月2回定期的に集まり朗読の稽古をしてきた。再演の機運が高まり、1992年8月に昼夜2回『この子たちの夏』の短縮版を再演した。メンバーは活動の中で手応えを感じ、「ひまわりの会」が続く限り朗読劇『この子

たちの夏』の上演を継続しようということになった。1993年は8月6日に市民コミュニティセンター(本通りパーキング)にて2回上演し、『この子たちの夏』以外にも、エッセイや民話、童話、詩を、たとえば、1993年12月11日には「お話の会 テーマ生きる」と題して福祉文化会館で上演するなど、「朗読の会」も行うようになった。難波は会では指導者という立場で、メンバーからも「難波先生」と呼ばれていたが、指導謝金を受け取らないばかりか、みんなと同じように会費を払って参加していた。

1994年は8月6日に県民ふれあい会館、8月9日は流しびなの館ふれあいホール(用瀬町)と2カ所で上演している。難波は、演出としての試みを公演プログラムに「ひまわりの願い」と題し綴っている。「初演ではスムーズな流れを狙い」、2年目は「逆にいかに適切な「間」を取るかを考え」3年目は、「如何に抑えるかに挑戦」し、4年目は「群読を取り入れた」と、同じ上演でも参加者の蓄積に合わせて、新しい試みをしていると語る。

1995年の夏、難波はすでに闘病生活に入っていたが、戦後50年という節目の年で、ひまわりの会はかつてなく精力的に『この子たちの夏』を上演した。7月22日の賀露小学校多目的ホールを皮切りに、8月5日は、鳥取市主催「被曝50周年非核平和事業」のひとつとして2回上演、8月6日はさざんか会館大会議室で、鳥取県原爆被害者協議会主催「鳥取県原爆死没者追悼・平和祈念式」のプログラムとして上演した。

翌1996年も、ひまわりの会メンバーの送迎や妻の助けを受けながら、最後まで面倒を見ていたと佐藤が追悼文で紹介している。ひまわりの会メンバーも、「ひまわりだけはやめたくない、と最後のギリギリまできてくれた」、「病室まで指導を仰ぎに行ったこともあった。病気の時も演劇には燃えている、そんな感じだった」と、難波最晩年の様子を語る<sup>37</sup>。

難波は1993年頃に、いったん体調を悪くしており、舞台芸術学院同期会会報で、この年3ヶ月以上入院したと近況を伝えている。翌年11月に上演された鳥取県主催、砂川演出の舞台事業・舞踊劇『忍冬(すいかずら)』に出演で参加しているが、「痛みを抑えながらの参加」であったらしく、難波自身が俳優として舞台に立つのは、1994年の『12人の怒れる男』が最後となった。そのような体調の中、亡くなる直前の1996年8月の公演まで、ひまわりの会のことを大切にしていた。

難波は、1991年の最初の『この子たちの夏』朗読上演に向けたテレビ取材(1991年6月25日放送「イ

ブニングネットワークとっとり」NHK)で次のような話をしている。今回の朗読劇に参加する女性たちは、舞台に関しては素人で、「とんでもないところで涙を流すことがある。そのセリフだけをみると、泣くようなセリフではない。しかし、そこまで語ってきて思いが積み重なり、堪えきれずに涙が出るのだと思う。それはプロの俳優にはない、ある意味本当の涙であり、だからこそ観客の心に強く訴えるインパクトがあると思う」と、アマチュアが演じるこの意味を語っている。

人前で演じる俳優という仕事に魅入られ、東京での演劇活動は断念したものの、鳥取で舞台に立ち続けた難波にとって、ひまわりの会の女性たちの朗読は、観客に純粋な思いを伝えるシンプルでかつ真実の演技に思えた。だからこそ、死の間際までひまわりの女性たちの言葉を見守り続けたのではないだろうか。

ひまわりの会は難波亡き後、市民劇『共斃社始末』で活躍した伊吹啓子にしばらく指導を仰ぎ、その後も鳥取演劇集団に所属する松本健一に指導を頼みながら、現在も活動を続けている。

## V. おわりに

難波は戦後すぐ、東京・池袋の舞台芸術学院に通い、その後しばらくは東京で演劇活動をしていた。「食べるものもない生活で、お金がなくて血を売ったこともある」と、難波はひまわりの会でよく話していたそうだが、難波の東京時代の演劇活動の詳細は不明である。舞台芸術学院の講習科(夜間)と本科に入学したことは、学院の記念誌で確認できるが、中間発表や卒業公演にどの程度参加したのか、また学院の附属機関として結成された研究機関(劇団)舞芸座への参画がどの程度であったのかは、確認できていない。難波が若い頃を回想した新聞記事に、学院の同期生で後に名脇役としてテレビにもよく出演していた梅津栄と、もう一人の同級生藤川昭との3人の共同生活が写真とともに綴られている。この頃梅津が劇団青俳の第1回公演『フォスター大佐は告白する』(会場俳優座劇場・演出倉橋健・ロジェ・ヴァイヤン作・1953年10月上演)に客演、大評判となり次々と仕事がきたものの、3人の共同生活はしばらく続いたという<sup>38</sup>。しかし、難波自身の演劇活動について本人は何も書いていない。甥の信之は、1951年公開の映画『どっこい生きてる』(今井正監督・前進座製作)にエキストラで出演したと、難波から聞いているが、映画映像からは確認できる情報

は得られなかった。鳥取での演劇活動については詳細かつ膨大な資料と記録を残している難波が、足掛け6年を過ごした東京での演劇活動については、わずかな資料しか残していない。東京でのプロの俳優としての道をきっぱりと断念したためであろうか。

難波は、優れた俳優には「匂い」がある、と何度か書いている<sup>39</sup>。人畜無害の雰囲気ではつまらないが、かといって「匂い」は意識的に作り出すのは嘘っぽく、自然と生まれ出てくる「人間臭さ」のある俳優を目指したいと考えていた。

一方、アマチュアが作る演劇については、観客とともに作るということ、すなわち一緒に暮らす地域の人たちとともに作り上げていくことが大切と考えていた。他劇団との交流、合同公演は、劇団員数が少ないからという消極的な理由からのみならず、演劇は広く地域の人々とともに作っていくものだという前提があったからであろう。演劇鑑賞会設立にかけたエネルギーも同じ考えから生まれている。「鳥取市民劇場」の難波には、広く楽しんでもらえる上演作品を選ぶというだけでなく、地域の人とともに歩んでいく、つまり、演劇に限らず地域の様々な団体や人々との交流を深めることによってこそ、アマチュアの演劇活動は継続できるのだという信念があった。

市民劇場で一緒に活動した劇団員、ひまわりの会参加者、そのほか難波を知る人は、誰もが難波の人柄を、温厚、優しい、怒ったところを見たことがないと答えた。それは反面、難波が個性的な芸術家ではなかったこと、また強いリーダーシップで組織をまとめていくタイプでなかったということでもある。残された膨大な記録と資料からは、丁寧さと几帳面さが伺える。多様なネットワークの中で市民劇場という劇団を存えさせてきたことを考えると、調整・ネットワークに能力を発揮したのだと思われる。お酒を嗜まず、真面目で面白みのない人、という見方をする人もあったようだが、残された文章や舞台に立つ映像をからは、飄々とした軽さとユーモアを持つ役者にみえる。

劇団員が少なかった70年代初め、難波が福祉文化会館で部屋の鍵を開けて待っていても、稽古に来る劇団員が他になく、難波と二人で雑談しながら長い時間を過ごしたこともよくあったと、元劇団員の方は懐かしそうに話す。難波の座右の銘は、「辛抱」である。難波は、演劇を続けるために、辛抱を重ねていたのだ。劇団員が少なければ、新聞に「仲間やーい！」と劇団員募集の広告を出し続け、市民劇があればそこから若い参加者を募る。職業を持って続け

るアマチュア劇団であるから、劇団員それぞれの生活や仕事の都合を優先せざるを得ないことを承知で、稽古場で劇団員を忍耐よく待ち続ける。難波が特定の芸術的な志向を持たないことから、高校演劇経験者や県外の大学で演劇活動を経験したUターンの若者が、劇団の門を叩く。彼らは新しい息吹を劇団にもたらすとともに、時には旧来型の劇団の存続を脅かす存在にもなりかねないところだが、むしろその若い世代の新しい舞台にも難波は軽々と役者として参加する。

帰郷後の難波の足跡を辿ると、そこには、上演活動を通して多角的に地域の文化環境と関わろうとする姿勢が見て取れる。その核にあったのは、自身が舞台に立つという執念だが、それだけに留まらない広がり人間関係を醸成した。

20世紀から21世紀へと時代は大きく進み、芸術文化に関する様々な制度や法律が整備されてきたものの、地方都市における演劇活動が、当時に比べてより活発になったとは言いがたい。戦後から1990年代初め、難波らのアマチュア演劇活動は、今ここにはない、望ましい仕組みを自ら作り出していこうとするものであった。アマチュア演劇活動は、関係者だけに閉じた演劇活動ではなく、市民による自発的な文化活動であり、また市民主体の文化環境構築の活動であった。演劇を通じて地域の文化環境を変化・発展させようとするこれら市民主体の活動は、市民が文化を通じて、より積極的に地域に関わっていこうとする活動であったと言える。

## 謝辞

本稿は、JSPS 科研費 JP18K00236 の助成による研究成果の一部である。ご多忙なか、聞き取り調査に快く応じてくださった関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本稿では、文末注に記載したほか、以下の方々から聞かせていただいた内容を参考としました。なお本文中は敬称を略させていただきます。（敬称略・順不同・文末の数字は聞き取り調査の西暦年月日）

前田翠：1932年生・NHK放送劇団1期生・210913  
 平家六栄：1938年生・市民劇場創立メンバー・191122  
 小林隆夫：1943年生・市民劇場・演劇集団所属・220825  
 入江洋司：1949生・1967年市民劇場入団・220906  
 渡辺紀雄：1949生・1971年市民劇場入団・220904  
 岸田安雄：1950生・1975年市民劇場入団 220914  
 石原八栄：1955生・1974年市民劇場入団・210521  
 伊藤勝：1961生・1978年市民劇場入団・2代目代表・210126

村上久子：1961 生・市民劇場団員・220316  
 平井知行：1952 生・市民劇場団員・210203  
 垣屋稲二良：1952 生・市民劇参加・210309  
 難波信之：1940 生・難波忠男甥・211221  
 大倉克敏：1937 生・「断層」元同人，220309  
 別所清平：1941 生・座・ユリイカ代表・220913

### 注

- 1 鳥取県立図書館に収蔵されている難波忠男寄贈資料（NHK 鳥取放送劇団，鳥取市民劇場，山陰関係としてまとめられた新聞記事スクラップ，公演記録ビデオ）を参照した他，2022 年 6 月に伊藤勝氏より提供いただいた放送劇団，市民劇場の公演プログラムを参考とした。
- 2 鳥取市内の舞台設備を備えた公立ホールは，鳥取市民会館が 1966 年，鳥取市文化ホールが 1980 年，鳥取県民会館（とりぎん文化会館）が 1993 年に竣工した。
- 3 岡村(2019)547p.
- 4 第 1 回の旗揚げ公演は，1948 年昭和 23 年 6 月 12, 13 日に行われた。公演プログラムに結成の経緯が詳しく記されている。演劇集団の活動については，砂川(1978, 1993)を参照した。
- 5 ここ数年，活動の実態は確認できないが，2022 年現在も正式には解散してはいない。
- 6 鳥取県岩美町出身の映画監督・テレビドラマ演出家で，詳細の足跡については岡村(2019)参照。
- 7 放送劇団『創立十周年記念誌 なみ』（1960・鳥取放送劇団発行）。岡本らによる発声・朗読ドラマの練習が，週に 3 回，半年ほど続いたという。
- 8 『なみ』では，難波は「2 期半」と紹介されている。
- 9 岡本の手書きガリ版刷りの教本『演劇ノートー鳥取放送劇団のために一（1）』目次より。また，岡本は慶應義塾大学学生時代に新劇の劇団文芸部に所属していたという（岡本 1968）。
- 10 柴山麻妃編集発行『演劇批評誌 NTR 特集 福岡の演劇の歴史④放送劇団』（2006）に詳しい。
- 11 劇団石公式ホームページ参照。  
<https://ishiweb.nomaki.jp/>
- 12 佐藤は，鳥取西高校で演劇部に所属，高校卒業後労働基準監督署に勤務しながら，NHK 鳥取放送劇団で活動するほか，1957 年に創設された劇団はまなすにも所属，また人形劇団こうま座の代表を長く務めた。佐藤の来歴とこうま座については，日本海新聞連載「舞台盛衰記」（S56.12.15 から S57.3.9 までの 10 回連載・佐藤執筆・第 8・9 回は山名立洋執筆）参照。
- 13 松本健一氏より提供を受けた。松本氏は高校在学中に，第 1 期生で教員の古谷嘉彦に誘われて放送劇団に入団した。
- 14 LG は NHK 鳥取放送局のコールサイン JOLG の LG をとったもの。ライターグループの書き手やその作品については岡村(2019)参照。これらの書き手の中から後の鳥取の文学グループのひとつが生まれている。一方，NHK 福岡放送局のように，既存の文芸同人誌「九州文学」が中心となって脚本執筆を担ったケースもある（柴山 2006）。
- 15 本名山根優一。放送劇団のための作品として、『海の壁』、『放送劇 夜の人々』（1956 年 4 月 17 日(火)放送・1955 年度懸賞放送劇入選作品），『鳥取小劇場 秋の夜』の脚本がある。
- 16 2022 年現在，これらの脚本を「鳥取大学地域参加型研究プロジェクト」経費により整理し，翻刻準備中である。放送劇団解散後の番組脚本も一部含まれている。
- 17 「(その 1)」で触れたように，難波の長兄文男は「演劇集団」に所属していたので，「放送劇団」の忠男と，兄弟で同時に出演しているラジオドラマがあったことも確認できる。
- 18 『つばくろの歌』は当時新進気鋭の脚本家藤本義一(1933- 2012)が，大阪府立大学経済学部在学中の 1957 年に芸術祭戯曲部門で文部大臣賞受賞した作品である。はまなすの公演プログラムからは，海外移民を扱った群集劇とあり，配役も多く舞台セットなどに苦労した様子が窺える。
- 19 スクラップブック『NHK 鳥取放送劇団』に切り抜きがあるが掲載日不明。執筆者疋田は，邑法第一中学校（統廃合によりのちに閉校）教諭である。
- 20 以下の報告がある。①「一つのケース 東京放送劇団の独立」『藝能』（舞踏芸術社）1959 年 1(6) 74-77pp. : 1959 年 6 月 1 日に，東京放送劇団が NHK の機構改革に伴い NHK から独立し，東京放送劇団となったことを紹介。②大山功「地方演劇のひとつの動き 山形市民劇場の場合」『悲劇喜劇』1953 年 7(1)21-23pp. : 山形市内で活動するアマチュア劇団が参加し，それぞれの作品を上演する「山形市民劇場」という企画に関する記事。昭和 26 年 10 月 27, 28 日に開催された第 1 回では，山形放送劇団が高校演劇部，山形演劇集団と合同で岡本綺堂作「修禅寺物語」を上演した。③人見嘉久彦「関西劇信 京都放送劇団の壮図など」『悲劇喜劇』1986.39(7)66-69pp. : 京都放送劇団の第 4 回研究会発表会開催に関する報告で，劇団は NHK 京都放送局(JOOK)が創設し，「終戦直後からラジオドラマなどで活躍した劇団で，当時のメンバーが指導者になり，今は NHK から独立」とある。④人見嘉久彦「関西劇信 アマチュア演劇の祭典」『悲劇喜劇』1991.44(6)64-67pp. : 京都で開催されている「KYOTO 演劇フェスティバル」の参加

団体に京都放送劇団がある。マイクの前で脚本を持って読む、今風に言えばリーディング公演（ラジオ放送の収録スタイルで舞台上演）で、コロナ禍前の2019年までは活動を継続していた。⑤人見嘉久彦「関西劇信五十周年を迎えた大阪放送劇団」『悲劇喜劇』1992.45(5).68-71pp. : 1940年（昭和15年）にNHKが生徒を公募、昭和16年から劇団が続いている。現在も公演活動を行っており、2022年11月に第65回公演「岸田国士一幕劇集」が予定されている。

- 21 スクラップブック『鳥取市民劇場 足あと①』に記載されている「劇団・鳥取市民劇場規約」は以下の通り。  
 (名称) 第1条 この劇団は、鳥取市民劇場と称する。  
 (目的) 第2条 この劇団は、演劇活動を通じて地域文化に寄与することを目的とする。  
 (団員) 第3条 団員は前条の目的に副(そ)い、その活動に参加できるものとする。  
 (運営) 第4条 この劇団を運営するために次の機関を置く。 1 総会 2 運営委員会  
 (総会) 第5条 1 総会は劇団の最高機関で、定例総会は年一回(春季)とし、運営委員会 又は劇団員の過半数が必要と認めるときは随時開くことができる。2 総会は団員の過半数の出席で成立し、その決議は出席者の過半数で成立する。  
 (運営委員会) 第6条 運営委員会の委員は総会で選出し、次の任務を担当して劇団の運営にあたる。 1 代表者 2 総務 3 企画 4 会計  
 (会費及会計) 第7条 1 団員は総会で定めた会費を納めなければならない。2 この劇団の会計は会費その他の収入で当て、その経理は総会の決定に基づいて行う。3 この劇団に会計監査を置き、監査の結果を総会に報告する。  
 (発効) 第8条 この規約は、昭和四十年七月七日より効力を発する。  
 なお、市報「とっとり」1981年12月の記事「ととりの文化サークル」では、平均年齢25歳、25人で始まった、と紹介されている。
- 22 佐藤は、劇団はまなす所属時、練習場所を探していた時に、NHKの子ども番組の公開放送で会場として何度か使用していた市立児童会館の館長三谷豊に相談する。子どものための活動であれば貸せると言われ、苦肉の策として、1958年にはまなす内に児童演劇研究部を設ける。三谷のさらなるアドバイスで人形劇を始めることになった。はまなすは解散したが、人形劇はこうま座として、その後長く活動を継続することになる。
- 23 1961年創設のざっこは当時、鳥取県倉吉市唯一のアマチュア劇団で、代表の尾嶋政幸が「宮本研、大橋喜一の作品を主に上演。リアリズム演劇を中心に活動して

きたが、合同公演をきっかけに新しいジャンルとして「詩劇」に挑戦」と自己紹介している。尾嶋はこの時26歳である。

- 24 座・ユリイカは、米子市の別所清平氏が創設した劇団。氏は、米子東高校から立教大学英文科に進学し、大学時代に演劇活動に参加した。ジロドゥー、ジャン・アヌイに傾倒、もっぱら演出を担当していた。長男だったため米子に帰り実家の米穀店を継ぐとともに、座・ユリイカを立ち上げた。市民劇場の佐藤と交流が深い。
- 25 別所氏によれば、ざっこの代表で最年少の尾嶋が相互交流に大変積極的だったようだ。
- 26 萬井は、東京の大学に進学、学生時代に劇場通いをし、放送劇団にも参加、鳥取演劇集団創設期のメンバーの一人である。
- 27 鳥取県演劇連盟は1973年末に、演劇集団、市民劇場、ざっこ、座・ユリイカのほか、米子市の演劇集団あり（宮倉義文代表）、劇団ぐみ（大谷昇代表）の6劇団でスタートし、翌年から東西地区に分かれて公演、1977年からは当番劇団が東西公演に参加する「交流公演」を1993年の第19回までは実施している。第18回公演ごろから、実際に上演活動を行う劇団は、演劇集団、市民劇場、ありの3劇団のみとなり、途中新たな劇団が短期間参加するも、徐々に演劇連盟としての上演は勢いを失う。現在のところ、2019年1月に鳥取市文化センターで上演された朗読公演が、連盟最後の事業となっている。
- 28 創作グループ蘆の会は、詩作、焼き物、デザイン、花、書など多様な活動を行う表現者の集まりで、代表の関収が、放送劇団にも所属しており、難波や佐藤らとの交流が深かった。
- 29 入江洋司、岸田安雄、小林隆夫、佐藤方伯、杉本優子、田中敦子、中島健造、難波、平井知行、平家六榮、前田勝、村上篤哉、村上久子、森理英、森下純子、米原文、渡辺紀雄の17名。
- 30 『名医先生』は、10の短いエピソードからなるオムニバス形式の作品で、キャスト全員が一堂に集まって稽古する必要のない作品ではあった。
- 31 日本海新聞記事（1984年6月23日付）によれば、「でこ＝大根役者」のことで「大根は生より煮た方が味がいい」から劇団名を取ったとのこと。代表の中島健造は高校卒業後、京都で会社に勤めながら、京都のアマチュア劇団に所属し1980年に帰郷した。
- 32 でこにたも、オリジナル脚本の上演はしなかった。
- 33 スクラップブック『市民劇場 足あと①』にある1971年2月14日の「労演まつり」のチラシより。
- 34 市民劇場という劇団名については、以下のようなエピソードがある。鳥取労演から、名前を改称する際に「鳥



取市民劇場」の名称を譲ってくれないかという話があったが、佐藤らがそれは頑として譲らなかった。一方、全国の労演が、「市民劇場」を名乗るようになってしまったため、「鳥取市民劇場」が労演組織（鑑賞団体）と間違われることも増え、あえて「劇団鳥取市民劇場」と名乗らねばならなくなったという。

- 35 地人会の上演は、地人会が解散する 2007 年まで各地で行われ、全国 393 市区町村で 767 回になったという。  
[http://www7b.biglobe.ne.jp/~e-h/chijinkai/konoko/konoko\\_fs.htm](http://www7b.biglobe.ne.jp/~e-h/chijinkai/konoko/konoko_fs.htm)
- 36 鳥取演劇鑑賞会(1992)2p.
- 37 2021 年 1 月 19 日、鳥取市城北公民館で例会に集まった会のメンバーにお話を伺った。参加者は、代表竹内和子氏、今本明子氏、北尾美津子氏、飼馬和代氏、川島三恵子氏、川上奈津代氏の 6 名。
- 38 1983 年 5 月 24 日付新聞記事「わたしのアルバム」。
- 39 1985 年 5 月 24 日山陰中央新報記事「” 匂い “のある人に感銘」、難波(1994)「自由席<4>」、難波(1984)など。

## 文献

- 舞台芸術学院 50 周年記念誌編集委員会編 (1998)『舞台芸術学院 50 年：俳優教育の歩み 1948-1998』舞台芸術学院
- 五島朋子 (2022)「アマチュア演劇を生きる(その1)-鳥取県立図書館難波忠男寄贈資料から-」鳥取大学地域学部『地域学論集』18(3)pp. 53-64
- 日比野啓 (2022)「「素人演劇」の現在 様式・教育・コミュニティ」日比野啓編『「地域市民演劇」の現在—芸術と社会の新しい結びつき』森話社 pp. 7-39
- 難波忠男 (1984)「新春に想う 人畜無害」月刊『Sky Town』7(37)pp. 7-8
- 難波忠男(1993)「舞台をつくる愉しさ」鳥取市社会教育事業団『鳥取文芸第 15 号 特集鳥取の演劇』pp. 7-9
- 岡本愛彦 (1968)「わたしの劇評 ジュネに乾杯!」『悲劇喜劇』早川書房 21(5)pp. 35-39
- 岡村知子(2019)「解説」,「岡本愛彦・初期の仕事-その来歴から見る NHK 鳥取放送局のラジオドラマ-」岡村知子他編著『戦後 NHK 鳥取放送局 ローカルラジオドラマ脚本集』鳥取大学地域学部 pp. 547-577
- 大倉克敏(1993)「鳥取の若き演劇グループ 「キホーテ」・「でこにた」など」鳥取市社会教育事業団『鳥取文芸第 15 号 特集鳥取の演劇』pp. 21-25
- 須川渡 (2021)『戦後日本のコミュニティー・シアター 特別でない「私たち」の演劇』春秋社
- 砂川哲夫 (1993)「演劇を外せば私の人生はない—鳥取演劇集団四十七年の歩み—」鳥取市社会教育事業団『鳥取文芸第 15 号 特集鳥取の演劇』pp. 14-20
- 砂川哲夫編著 (1978)『鳥取演劇集団 30 年小史』鳥取演劇集団
- 鳥取市社会教育事業団 (1993)『鳥取文芸第 15 号 特集鳥取の演劇』
- <その他資料>
- 鳥取演劇鑑賞会『朗読劇 この子たちの夏 1945・ヒロシマ・ナガサキ 自主公演記録集』1992 年 6 月 30 日発行・松岡正也「自主公演が実現するまで」
- 「演劇グループの歩み 舞台盛衰記」掲載期間 1980 年 9 月 23 日~1982 年 6 月 (連載 90 回) 日本海新聞
- 「わたしのアルバム 鳥取市民劇場 難波忠男さん」1983 年 5 月 24 日付新聞記事(スクラップブック『山陰関係 35』p. 29)
- 「ひと “変身願望” を満たす/アマチュア演劇に打ち込む 難波忠男さん」1984 年 9 月 19 日付新聞記事 (スクラップブック『山陰関係 41』p. 19)
- 「” 匂い “のある人に感銘」1985 年 5 月 24 日付山陰中央新報記事
- 「この人 難波忠男さん 演劇の道一筋の人生 市民劇 “いなばの寝太郎” で主役となる」1988 年 9 月 9 日付新聞記事(スクラップブック『いなばの寝太郎』p. 46)
- 「自由席<4> 難波忠男 味と匂い:個性もつ二人とともに」1994 年 9 月 10 日付新聞記事 (スクラップブック『山陰関係 67』p. 25)
- 「あの人この人 若者演劇グループ「でこにた」の代表 中島健造さん」1984 年 6 月 23 日付日本海新聞記事